

(別紙2)

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2490800238		
法人名	(株)明日葉		
事業所名	グループホームあした葉結の家 みやがわ		
所在地	三重県伊勢市佐八町字前田712番地1		
自己評価作成日		評価結果市町提出日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/24/index.php?action_kouhyou_detail_2014_022_kani=true&JigyosyoCd=2490800238-00&PrefCd=24&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	BERシステムズ株式会社		
所在地	三重県 四日市市 八王子町 439-1		
訪問調査日	平成 27年 11月 7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所は平成26年4月にオープンした。5月から利用者様を迎え、平成27年6月に1棟が満床になった。1年目は地域に馴染むことを第一に考え、町内を散歩し、出会った人に声をかけるようになってきた。美容院も地域の方をお願いしている。隣の保育園とはいつでも行き来できるようにしており、ホームの窓からかわいい園児が顔を見せてくれることもよくある。運動会、夕涼み会、クリスマス会等には利用者を招待していただき、行事のある日にはホームの駐車場を園児のご家族のために開放させていただく等お互いに助け合いがある。食事は地元の野菜、魚等中心に購入し、調理も自分たちで行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

設立2年目に入った施設であり、新しく非常にきれいである。個人用居室は窓が大きく開放的で利用者には外の景色も楽しめる工夫がある。共有スペースも広く外光を十分に取り込める構造で明るく開放的である。その中で、認知症特有の強い光への対応としてカーテンの使用等により十分な配慮がされている。トイレも1ユニットに5か所あり、うち2か所は隣どおしで、左右の上肢障害者がそれぞれ利用し易い様に左右対称に配置する等、理学療法士の経営者の視点と長所が生かされている。理念である「結の精神」を職員全員が共有し、近隣どおし、仲間どおしでお互いに助け合って、利用者一人ひとりを尊重した生活支援が行われている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	オープン以来まず地域に溶け込むことに重点を置いて来ました。昨年理念を「事業所内に掲示されていない」と指摘があったので、直ぐ掲示し、家族には『結の家だより』を発行し、伝えるようにした。	職員全員に理念である「結い」の精神が浸透しており、日常の利用者への介助や支援でも相互に声掛け、助け合いが実践されている。近隣に対しても、例えば隣の保育園で行事があれば、施設の駐車場を保育園児の家族のために開放しており適切な実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年も地域の『かんこ踊り』に参加し、保育園とはクリスマス会、夕涼み会、運動会等行事に呼んでいただいたり、お互いの散歩コースだったり、普段から交流がされている。	日課の散歩で周辺住民に気軽な声掛けができています。地区や隣接保育園の行事に積極的に参加し、特に保育園との交流では、5分間隔のトイレ利用者が半日トイレと言わずに交流できる等大きな精神的支えとなっている。	当施設においても職員確保が大きな問題となっているが、その対策を兼ねて、地域住民の力を借りることを要請しての短時間ボランティア等の活用を検討してほしい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	利用者の居るロビーで、認知症の方達の生活の一端を見ていただきながら運営推進会議を開催することにより理解をしていただけるように努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	昨年9月、保育園との間のフェンスを常に行き来できるようにしたことにより、今年の防災訓練はこのコースを通して園児が避難をした。	地域包括からの意見で、社長が理学療法士であることから、その関連の活動として地区の人々に対する講習会開催を要望され、実施に向けて準備中である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	伊勢市介護保険課には、迷った時すぐに相談し、アドバイスを求めるようにしている。包括支援センターには、毎回地域推進会議に出席していただき行政からの意見をいただいている。	市の担当へは施設長が細かく連絡し、情報交換が盛んで、新しい情報や詳細なアドバイス等が市町村や包括から提供されている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は玄関や窓の鍵は掛けないで自由に出入りできるようにしている。身体拘束についてはある利用者が、身体中掻きむしり、困り果て、ミトンをとる声も出たがミーティングを繰り返して「しないケア」をすることになった。	職員に対する身体拘束についての教育は的確に実施されており、全職員はどのような事が身体拘束であるかを理解している。利用者の施設外への出入り等は自由になっているが、常に職員が寄り添っており、知らない間に出ることはない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	『虐待防止』の研修に2名参加し、スタッフ会議でそれを報告、全員で不適切なケアをしないように話し合いをもった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	まだケースもなく、職員への説明も行われていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	今回は介護保険利用料金の改定、利用料の負担割合の変更等あり、その都度家族に来ていただき、説明し、理解、納得の上、押印をいただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	殆どの利用者家族が通院、消耗品を届けていただく等で月1回以上は面会していただいている。その際、何でも話していただけるような雰囲気を作るよう留意している。	施設入り口に、訪問者用の意見箱の準備がある。家族が訪問時は職員が利用者の生活の状況等の話をして、意見を聞いている。過去には利用者の「焼き芋をしたい」という意見から庭での「焼き芋パーティー」を実施した。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回スタッフ会議を行い、職員の意見を聞いている。また、年2回代表が職員と個人面談を行い、出された意見を運営に反映させるようにしている。	月1回スタッフ会議を実施している。また、社長が年2回全職員に対し、個人面談を実施しており、これらの機会に職員からの意見が確認されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格の有無で給与に差があるが、職員には資格取得の機会を設け、意欲向上できるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年は認知症介護実践者研修に1名参加している。その他外部研修の情報は常に照会し、なるべく多くの職員が参加できるように働きかけている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市内では社協や連絡協議会を通じ、また平成27年1月からは三重県地域密着型サービス協議会に加入し、同業者と交流、勉強会へ参加する取り組みをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス利用の相談があった時は、家に訪問し、本人ともよく話をし、信頼関係を築いた上で、安心して来ていただけるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでの生活、悩んだこと、困ったこと等ゆっくり聞かせていただくようにしている。これからどんな風に生活していってほしいか家族の思いを知り、サービスにつなげるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時、本人、家族の思い、状況を知り、しっかり話を聞く中で信頼関係を築き、今、一番必要なサービスにつなげる様努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者とは、棚の組み立て、包丁研ぎ、新聞紙の袋作り、洗濯物干し、タタミ…いろいろな場面で助け合い、一緒に暮らしを支えあっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	通院介助、消耗品の購入、季節の衣類・寝具の交換等、声をかけ面会の機会を作り、共に本人を支えていく関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族の協力があれば、家に帰ったり、墓参り、老人会、買い物等に行くことをお勧めしている。	施設長他で、入所前に自宅を訪問し、生活環境や成育歴等、周辺状況を確認し馴染みの人や場を把握している。宗教上は全く自由になっており、“道場”に通っている利用者もいる。家族の協力を得て自由に墓参りや法要の参加のため、一時帰宅もしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う利用者同士が話ができるよう座席を配慮し、孤立しがちな利用者には職員が間に入って会話できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院された時等、馴染みの職員が見舞いに行く等関係性を大切にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家に居た時と同じように、じっくり部屋で新聞を読んだり、好きな時に部屋でごろ寝をしたり、本人らしい生活が継続できるように努めている。	自分の意思を表現できない利用者に対してはモニタリング、日々の観察(業務日誌)で意向を確認し職員間で共有している。また、時代小説が好きと聞けば、職員が自宅から時代小説を持ち込み居室に置いたりしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	面会時、家族等と話をしたり、夜勤時1対1で、また、日中、外のベンチで話を聞いたりする中で、これまでの暮らし方を把握できるように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの記録をスタッフ全員共有できるように、排便の記録には特に気をつけ、安定した心身状態で生活できるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族には面会時や電話で、スタッフには会議や朝のミーティング時話を聞くようにしている。主治医には毎月の受診時1ヶ月の様子を『受診カード』で知らせるようにしている。見直しは3ヵ月毎にしている。	施設長が家族に電話での現状報告を頻繁に行っており、この時に家族からの意見等を収集している。職員間はスタッフ会議でカンファレンスを行い、医療機関受診時の「受診表」などを基に半年ごとに介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の利用記録には、食事、排泄、入浴等や日々の暮らしの様子を記入し、すべての職員が情報を共有できるようにしている。大切なところは、スタッフ会議で再確認している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	帰宅願望の強い利用者の面会時、職員も家族と一緒に家に行った。その時本人は直に「もう帰ろう！」と自分から言い帰ってきた。家族での通院が困難な時は一緒に行くこともある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の理美容院には必要時訪問サービスをしていただいている。交番からはまだ運営推進会議への参加はないが、毎回資料を届け、話をする機会を持っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的に家族の送迎でかかりつけ医に通院していただいている。家族による通院が困難な方は月1回協力医の往診もある。	協力医の押し付けはしていない。殆どが施設から遠方の利用者で、以前からのかかりつけ医の利用時には、伊勢市の「福祉タクシー」の利用券の使用も紹介している。近くの提携医は月1回訪問による往診がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師の職員配置はない。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	定期受診の際、1ヶ月の本人の様子、直近3日間のバイタル、体重、排便情報等伝えている。また、気になることがあればその都度、主治医に連絡しアドバイスを受けるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	昨年末、終末期の利用者を迎えたため、急遽、家族、主治医、看護師を交えて、何処までグループホームで見て、医療に引き継ぐか・・・等話し合いを持ち、意志確認書を作成した。	開所2年弱で、現時点で職員の対応力等から看取りは困難であることを、家族・利用者と入所時に話し合いを行い理解を得ている。家族・医療機関・ホームとの連携はできており、スムーズに次のステージに移行できるように取組み努力している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の応急手当については、実技を受けた経験のある職員が皆に伝えるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	9月1日に防災訓練を行った。保育園は2日に行い、当施設の中を通過して避難していた。後半には防火訓練を行う計画である。	開所2年弱であることから、消火器・スプリンクラーの設置、消防署との直通電話など、行き届いている。オール電化であること、施設住所は海岸から遠く高台であること等から、火災、津波、水害等はその心配は全くない。	地震発生に対し、対応マニュアルの完備があるが、夜間1人体制となること等を考慮して、発生時の初動として何をやるのかを職員全員に徹底するため、よく見える位置に掲示等の配慮が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「本人に恥ずかしい思いをさせない。」ことをいつも頭において介護するようにしている。	トイレへの声掛けは、時と場に応じて周囲に気づかれない表現を心がけている。入浴も利用者一人ずつ順番で、重ならないよう工夫されている。呼びかけも今まで呼ばれていた苗字または名前で呼びかけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	「ゆで卵が食べたい!」「○○大好き!」ふっともらした言葉を大切に、可能な時は、それに答えるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「時代小説を読みたい」「絵が描きたい」等希望がある方には、自由に過ごすことができるように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	地域の理・美容院から来ていただき、本人の好みの髪型にカットしていただいている。入浴時、出来る方には、自分で着替える服を選んでいただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	朝市や地域の店で旬の魚や野菜を購入し、皆で献立を考えながら食事作りをしている。ご飯の炊ける匂い、おかずの匂いができて、食べることへの楽しみが増すように工夫している。	食材は漁港が近いこともあり、旬の海産物を活用している。好き嫌いに対しては嫌いなものは別のものに変えることも対応している。	食事準備は職員がしているが、献立作成への参加、食材購入の同行や簡単な作業の分担実施等により、自分たちで作った料理を食べるという達成感も持てる工夫が望まれる。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの食事量を把握し、なるべく残さず食べられるようにしている。水分はいつでも好きな時に摂れるように各自ペットボトルを持っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事の前は『口腔体操』を皆で行い、食後には一人ひとりに合わせた口腔ケアを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを把握し、トイレでの排泄を基本に支援している。この1年で夜間、オムツが必要になった方が2人いるが、日中はトイレに行くようにしている。	自立排泄の重要性を認識し、一人ひとりの状況を記録した排泄記録の活用により、職員による声掛けを適時に行い、おむつの使用は夜間に1名と体調不良で本人からも希望が出されたときのみ限定されている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日牛乳を飲んでいただいている。また、腸の働きを良くする為、積極的に散歩に誘うようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日ローテーションを組み、少しでも入浴の機会が多くなるよう努めている。入浴日でなくても本人の状態が必要な時は、入浴できるように支援している。	入浴は、週3回で座シャワーも完備していることから、足腰に不安がある利用者も専用車椅子で安心して楽に入浴を楽しむことができる。入浴を嫌がる利用者はないが、利用者の気分に合わせて、柔軟に対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	週1回シーツ交換、布団干しを行い、気持ちよく眠れるよう支援している。また、日中、外で過ごす時間を増やすよう工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬チェック表を用いて、利用者が確実に服薬できるよう工夫している。また、ファイルには薬の効用、副作用の説明書きも綴じてあり、全職員に分かるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	包丁研ぎ、洗濯物干し、たたみ、新聞紙で袋作り等できる仕事をお願いしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	周辺を散歩したり、季節の花を見に行ったりするようにしている。普段利用者はベンチで過ごすことが多いが、保育園児が散歩で通りかかり触れ合いを持つことが大変楽しみになっている。	外出は天候的に不可能なとき(猛暑日、雨、雪、猛寒日、など)以外毎日行っている。希望により家族の訪問時に一緒に外出することもある。また、男性職員の勤務時には、皆でドライブを楽しむこともある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分でお金を持ってほしい希望のある方には、カットの費用等小額を自分で払う等していただいている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人から電話することはないが、家族に掛けてもらい話をしている。家族から毎月絵葉書が届く利用者も居る。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自然豊かな立地条件である。窓から季節感を味わうことができる。時には猿等動物も見ることができる。また、利用者の様子を見て、温度、明るさを決めている。	共用空間には通常家庭に同じように、置物や観葉植物などが置かれ、自宅と同じような雰囲気心がけられている。窓にはカーテンがあり、明るく開放的である中で光線を和らげる工夫がされている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合った人と自然に隣同士になる席順が自然に生まれている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	なるべく使い慣れた物を持って来てと働きかけている。部屋の壁には施設で撮った写真を飾り、自分の部屋であることをわかるようにしている。	各個室は入所時に一人ひとりの自宅を見て、家族や本人と話し合い、馴染みの家具や置物を配置している。、足元から天井に続く窓で、外界との境を感じさせない。一人ひとりの好みに合わせた居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	部屋には自分で書いたネームプレート、目印をつけることで、自分の部屋がわかるようにしている。		